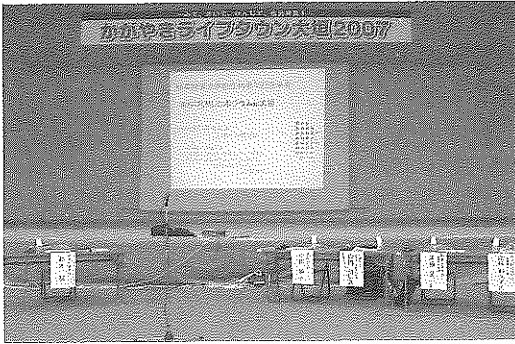


●まちづくりシンポジウム in 大垣

かがやくまちを 市民の手で！

～水の都・大垣

〈パネリスト〉小川 敏^{1*}・山門健一^{2*}・工藤英一^{3*}・國枝利久子^{4*}
〈コーディネーター〉鈴木 誠^{5*}



鈴木 皆さんこんにちは。岐阜経済大学地域連携推進センター長の鈴木誠と申します。

昨日、今日と、「まちづくりカレッジ」という学生たちが主体のまちづくりへのかかわりの全国の経験交流会を、ここ大垣で開催いたしましたところ、全国13の大学からたくさんの学生の皆さん、そして学生と一緒にフィールドに出て教育研究に携わっている学生大好きな先生たちがこぞってくださり、たくさんの報告もありました。

また、この会場の後方では、市民活動の皆さんたちが日ごろの成果を紹介したり、販売活動をしたり、経験を交流したりしながらネットワークの輪を広げておられます。まさにこれが大垣の一つの財産だろうと思います。

これから人口がどんどん減っていくということがあります。また、高齢化が進むということもあります。だからこそ、大垣という地域に暮らす人々が目標をもち、生きがいをもち、充実した人生を暮らしていく、それもひとりではなくて、いろんな人たちと手を取り合いながらそんなふうにも暮らしていけるような仕組みをつくるのが、これから大事になってくるのだら

うと思います。

今日は、さまざまな分野で自分の特技を生かし、自分の能力を発揮して、自分自身の生きがいと同時にまちの潤いをつくり、まちの発展の基礎をつくっていく市民の皆さんがますます活躍できる場をどうつくっていったらいいのか、特に大学がどのようにかかわりをもっていったらいいのか。そんなことを追求するシンポジウムを、「かがやくまちを 市民の手で！」と題して、ここ大垣で開催させていただくことになりました。わずかな時間ではありますけれども、経験交流をし、あるべき「かがやくまち」を市民の手でつくっていくための方策を、皆さんになるべくわかりやすくご提言いただくような場にしていきたいと思っています。

それでは、シンポジストの皆さんをご紹介しますと思います。今日のメインゲストであります大垣市政のリーダー、小川大垣市長、そして私ども岐阜経済大学と連携協定を結んでおります、沖縄県那覇市にあります沖縄大学の山門先生、同じく岐阜経済大学と連携協定を結んでおります北海道江別市の、これは札幌のすぐお隣になりますが、酪農学園大学教授の工藤先生、それから産学協定で日ごろ一緒にまちづくりや産業振興などに携わっていただいております地元の著名なシンクタンク、共立総合研究所の國枝研究員です。このようなメンバーでこれからシンポジウムを進めてまいりたいと思います。昨日はずいぶん温かかったのですが、今日は大垣らしい気候となりました。そういう寒い中ですが、しばらくおつきあいたいただきたいと思っています。

それではまず大垣市のリーダーである小川市

^{1*}大垣市長、^{2*}沖縄大学副学長・法経学部教授、^{3*}酪農学園大学酪農学部教授、^{4*}共立総合研究所調査部研究員、^{5*}岐阜経済大学教授・地域連携推進センター長

長から、この大垣市のまちづくりのいろんな課題、あるいはその課題を直視して取り組んでこられていること、特に多くの市民の皆さんが日常的に活躍する場をどんなふうにしてつくってこられたのかといったところを話題提供していただこうと思います。

問題提起

■大垣市の現状と今後の方向性

小川市長 皆さんこんにちは。ご紹介いただきました小川でございます。

今日は肌寒い日になりましたが、たくさんの方々に集まりいただきありがとうございます。

鈴木先生から話題をふられました。大垣市が抱えている現状と課題、問題点、そしてこれからの大垣について、特に若者、学生さんに対してどういった期待があるのかということについて少しお話をさせていただきたいと思っております。

大垣市の現状

まず大垣市の現状と今後の方向性ということで、大垣市のデータをご覧いただきたいと思っております。

大垣市の人口は16万7,033人ということですが、5年ごとの国勢調査のたびに少しずつ増えているということで、非常にありがたいことだと思っております。しかし、あまり大きく増えていないというところは、ちょっと寂しい点なのかもしれません。

大垣市は昨年3月27日に上石津町、墨俣町と1市2町合併をいたしました。その合併により人口が約1割増えまして、昨年3月には15万2,000人ほどでしたが、いまはおよそ16万7,000人ということになっております。

人口は1割増えましたが、面積のほうはどうかというと、2.5倍増えて約207km²になりました。合併する前は79km²でしたから、合併によって山林などを抱えた自然豊かな大きなまちになったというのが現在の市でございます。

そして、外国人の方が7,338人おられます。一時期3%台まで減ったのですが、ここ二、三

年でまた増えて、いまは4.4%ということで、100人のうち4.4人が外国人、特に日系ブラジル人の方、中国人の方が多いというのが現在の市でございます。

日本全国に外国人の多いまちというのはたくさんありまして、豊田とか浜松とか豊橋とか鈴鹿、岐阜県でいうと美濃加茂とか可児とか、産業が活発で活性化しているまちでは外国人の人口が多いわけですので、大垣市にある程度外国人の方がいるというのは、ある意味活性化している証拠ではないかと思っております。

財政規模はどうかというと、通常の会計でございます。一般会計は525億円。以前は460億円くらいだったのが、合併することによって60億円ほど増えております。それから、特別会計とか企業会計というのは独立した別個の会計でございます。水道とか下水道、あるいは競輪とか国民保険とか市民病院とかいったものが別の会計になっているということでございます。大垣市の一般会計は大体500億円と見ていただければいいのではないかと思います。

大垣市の課題

そこで大垣市が抱えている課題と、大垣がこれから長期的に発展していくうえにおいて課題となるものはいったい何であるかといいますと、一つはやはり少子高齢化社会の問題です。2番目には産業の振興、経済が発展することが大切なわけでありまして、そして3番目には行財政改革。財政状況の大変厳しい中でございますので、スリムな財政にして、小さな市役所、大きなサービスを目指していくことが大きな目的となるわけでございます。こういった三つの大きな課題を抱えて、これから大垣市をやっていくということになるわけでございます。

そこでまず少子化の課題でございます。合計特殊出生率とって、1人の女性が一生に産む子供の数が2.1人ですとちょうど人口が維持できるという水準になるわけですが、ここのところ全国的に減り続けております。大垣市は全国に比べればまだ高い水準にはあるわけですが、大垣市でも減り続けているということでござい

ます。しかし、このまま減り続けるとまちに活力がなくなってくるということになりますから、少子高齢化に対してしっかりとした対策をとっていくことがきわめて大切になるわけです。

先ほども申しましたように、この3月に大垣市は合併をしたわけですが、そのときのスローガンに「子育て日本一のまちづくり」というのを掲げさせていただきました。これはたくさん子どもが生まれて元気に育つようなまちづくりを進めていこうという趣旨でございまして、そのために少子化対策をしっかりとやっけていこうということでございます。平成18年は1.34人と減っておりますので、これからがスタートだと思っております。乳幼児医療費無料の対象年齢を広げたり、保育園の保育料を引き下げたり、子育て支援の子育てサロンとか子育て支援センターをつくったりと、いろんな少子化対策を進めていくということでございます。

それと同時に、高齢化の課題というのもあります。高齢化率がだんだん高くなっておりまして、大垣市におきましても、65歳以上のお年寄りには平成12年には16%だったのが、平成19年には20%を超えるという状態で、2050年になる前に25%、4人に1人が65歳以上のお年寄りになるのではないかとわれております。

このように少子化が進むと同時に高齢化が進んでいくということで、平成17年には初めて日本の人口が減り始め、いよいよ人口減少社会が始まったわけでございます。これは生まれてくる子どもの数よりも亡くなられるお年寄りの数のほうが多いということですので、それだけ経済の規模も縮小し、パイが縮小し、まちに元気がなくなってくる、活性化しなくなってくるということでございます。人口が1割減ると経済の規模が単純に1割縮小するということですから、人口が減った分だけ経済が小さくなってしまふ。

では、人口が減ってもなおかつ経済の水準を維持して豊かさを維持していくにはどうしたらいいかといいますと、技術革新をして労働生産性を上げていく、地域を活性化することによ

て経済の水準を維持していく必要があるわけでございます。そういう意味でも少子高齢化対策をしっかりと進めさせていただいて、人口の減少に歯止めをかけ、生産人口の増大を促し、地域を活性化させていきたいと思っております。少子高齢化社会はこれからの大垣のまち、日本の国が抱える大きな課題であるということが一つ言えるかと思えます。

2番目に地域を発展させていくための大きな課題は産業の振興でございます。大垣の工業出荷額、製造品の出荷額は5,000億円前後でございます。平成11年には5,200億円でありまして、一時4,500億円まで減りましたけれども、平成17年にはまた5,100億円まで増えてきたということで、大垣の工業出荷額というのはずっと5,000億円前後で推移をしております。

皆様は、5,000億円前後で推移をしているから大垣の工業というのは変わっていないのではないか、製造業はこの十数年ずっと同じなのではないかという疑問を持たれるかもしれませんが、実はその中身は大幅に入れかわっております。十数年前の大垣市の製造品出荷額も5,000億円であったわけですが、その主たる産業は紡績とか繊維工業でございました。しかし、現在の5,100億円の中身で一番大きいのは電子部品でございまして、それ以外にも自動車部品とか石灰とかいろんな産業が入ってくるということになりまして、この十数年間、製造品出荷額はずっと横ばいで推移をしているけれども、その中身は大幅に入れかわっているということをぜひご理解いただきたいと思えます。

これはある意味では産業がうまくシフトしつつあるということでございまして、横ばいからさらに上昇するように促していきたいと思っております。産業振興をすることによって雇用が確保され皆さんの所得が増え、また市の税収も増えて市民の皆さんに対する行政サービスも充実させていくことができるわけです。特に市民の皆さんから要望が多いのは安全・安心のまちづくりでございまして、地震対策、治水対策をしっかりとやってくれ、高齢者福祉の対策をしっかりとやってくれという要望がた

くさんあるわけです。しかし、それも財政が豊かであればこそできるということでございますので、そのためにも製造品出荷額、産業の振興というのは2番目に大きい課題であると思っております。

3番目に大きな課題となるのは行財政改革でございます。データで見るとなかなか読み取りにくいかもしれませんが、財政力指数というのはそれぞれの自治体の財政力の強さをあらわしたもので、財政力指数が1以上になると、国の交付税、補助金を受けなくてもやっていける自治体ということになるわけでございます。大垣市は平成4年まで1以上の財政力指数を誇っておりました。それがこの15年間ずっと0.8とか0.9であったわけですが、平成19年には15年ぶりに財政力指数が1以上に復活をして、国からの補助金を受けなくても財政運営をやっていける自治体になったわけでございます。これも市民の皆さんのお力添え、また産業が一生懸命がんばっていただいた結果ではないかと思っております。

また、経常収支比率というのは、人件費とか借金の返済とかいったどうしても払わなければいけない義務的経費がどれくらいあるかということですが、これがまだ八十数パーセントございます。75%くらいになると健全財政になるわけですから、そういう意味では健全財政までにはまだまだ時間がかかるということでございます。

いずれにしても、行財政改革をしっかり進めることによって、スリムな行政、市民サービスの充実に努めてまいりたいと思っております。小さな市役所、大きなサービスを実現し、市民の皆さんに喜んでいただけるような自治体をつくっていかうということでございます。

大垣市の一般会計の市債残高は、平成9年には574億円でしたが、これも平成18年度末には459億円にまで減ってまいりました。平成17年には468億円と少し増えていますが、これは合併によって一時的に増えたということでして、あとはずっと減少傾向でございます。ですから、ピーク時に比べて170億円ほど借金が

が減っているということになりまして、だんだん借金は減りつつある、スリムな健全財政に向かいつつあるということでございます。

それから、財政調整基金というのがございます。これは自由になるお金が幾らあるかということでございます。借金が減ってもこの基金のほうが減ってしまえば意味がないわけですが、借金が減っていくと同時に基金のほうも増えたり減ったりということで、健全財政が維持できるような体制づくりが進んでいるところでございます。

このような形で行財政改革をしっかり進めて、体力ある足腰の強い自治体にして、しっかりした住民サービス、市民サービスをするということでございますので、ぜひ皆さん方のご理解をいただきたいと思っております。



大垣市の潜在力

あまり時間がありませんけれども、大垣市もっている潜在力ということについて申し上げますと、大垣市には産業資源がいろいろあって、先ほど申しましたように、県下一、二を争う工業出荷額、製造品出荷額を誇っております。また、ソフトピアというIT産業、情報関連産業の基地がございますので、このソフトピアを軸にしたIT産業の育成ということがこれから大きな課題になってくるのではないかと考えております。

また、まちづくりの資源としては、ソフトピアセンターとか地区センターとか青年の家とか、いろいろなインフラが整備されておりまして、地域の社会活動の拠点として皆様方に活用していただいているところです。

それから、自然・歴史・文化資源については、「奥の細道」むすびの地であるとか、大垣城の城下町とか美濃国分寺跡、さらには美濃路大垣宿、中山道赤坂宿といった古い歴史資源がありますので、この歴史資源を大いに活用して魅力のあるまちづくりを進め、観光交流人口を増やしていきたいと思っております。今後の課題としては、「奥の細道」むすびの地、大垣城郭をいかにして整備していくか、そしていかにして多くの方々に来ていただくか、このへんが市としての課題ではないかと思えます。

自然資源としては、水の都・大垣でございまして、おいしい地下水が豊富にございますので、これを大いに活用してまいりたいと思っております。現在も大垣市内のあちらこちらに自噴井がありまして、各地からおいでになった方々に大垣のおいしい水を堪能していただいているところです。また、環境にやさしいまちということで、ハリヨが泳ぎ蛍が舞う水都・大垣を理想的な環境都市像としてがんばってまいりたいと思えます。

最後になりますが、いろいろな人的資源がございまして、大学の皆さんもそうですし、「かがやくライフ」で今日もお集まりでございましてけれども、市民の皆様方の潜在的なパワーをいかにして発揮していただいて活力のあるまちづくりを進めていくか。これもこれからの大きな課題でございまして。

大学への期待

若者に対する期待、学生さんに対する期待ということにつきましては、今後、まちづくりについて若い人たちから積極的に発言、提案をいただきたいと思えますし、また若い人たちは将来を担う大切な人材ですので、大学では人材育成をしっかりやっていただきたいと思えます。さらには、単なる提言、提案だけではなくて、福祉、環境、青少年育成、緑化事業などいろいろな分野の活動に若者たちに大いに参加していただければありがたいと思えます。どうぞよろしくお願いたします。

鈴木 まず市長に口火を切っていただきました。大垣のまちにお越しになった全国の大学の

学生の皆さんに、大垣というものを客観的に知っていただくということで、大垣のまちの様子を歴史的にもふり返っていただき、それから少子化や高齢化、人口減少とか産業振興、さらには行財政改革とかいったことは共通の問題なんだよということで話題を提供していただきました。

昔は産業の振興によって税収を上げ、福祉サービスをはじめとした市民サービスを充実させていくという流れがあったと思うのですが、市長さんのお話にあったように、税を納める人が減っていく、そして企業もグローバルに展開していくということになると、行政だけが一方的に市民にサービスを提供するという形がいつまでも続けられるわけではありません。そういう中で、市民の皆さん自身が、自分の生きがいだけではなくて、社会のためになる、あるいは社会をよりよくするというところに参画をしていく人材として育つような環境づくりをしていくということ、そういう市民活動の場をこれまでつくってこられました。

そういったことは皆さんのまちでも必ずやあると思えますのでふり返っていただくといいと思えますが、そのような地域社会を支えていく人材づくりに大学を挙げて取り組んでいる様子を、お二人の先生から紹介していただくと思えます。

山門先生の沖縄大学は「自分ブランドをつくらう」というテーマでまちづくりにかかわってみえます。「自分ブランド」、つまり市民一人ひとりが自分の個性を発揮して、その個性をお互いに認め合う地域社会をつくっていく。そして、学生に教室で教えるだけではなくて、市民の皆さんと一緒によりよいまちづくりに取り組む中で、学生と市民が一緒になってそれを探っていくということ、この「自分ブランドづくり」「地域ブランド」づくりをしている沖縄大学を、山門先生から紹介していただくと思えます。

■開かれた大学から共生実践する大学へ

山門 こんにちは。沖縄大学の山門と申します。

本学の大学改革は1978年から始まっているのですけれども、少し歴史を追いながら、いまだ

ういうことをやっているかというお話をさせていただきます。

当初は市民に公開講座をやるというところから始まったのですが、今日では地域とともに持続可能な社会をつくる、大学も積極的に地域づくり、まちづくりにかかわっていくという方向にきています。私立大学協会は「地域共創」という言葉をつくっていますけれども、そういう取り組みを紹介させていただきたいと思います。

地域との連携

戦後沖縄ではやった島唄に、「唐ぬ世から大和ぬ世 大和ぬ世からアメリカ世 ひるまさ変わたる此ぬ沖縄ゆ」というのがあります。「唐の時代から、明治になって日本になって、戦後はまたアメリカ世になった。目まぐるしく変わる沖縄よ」と唄っているわけです。世代わりが激しかった。そのために社会が大きく混乱したわけです。

その後1972年に再び世代わりがあって日本に復帰したときに、本学は存亡の危機に直面したわけです。詳しいことは省きますけれども、なかなか解決策が見い出せなかったのですが、1978年から本格的な大学立て直しの作業に入ったわけです。

最初にやったのは大学理念の確立です。「地域に根ざし、地域に学び、地域と共に生きる、開かれた大学」ということで、徹底的に地域に根ざして取り組んでいこうということでありました。改革の中身は入試制度の改革とか就職指導の強化で、これには相当力を入れまして、就職率はかなりアップしました。それから、派遣学生制度は後に単位互換制度になって、岐阜経済大学も含め北は旭川、札幌大学、茨城キリスト教大学、和光、津田塾、法政、東京国際大学、京都精華大学、広島修道大学と、全国の10大学くらいと学生交換をやっているわけです。

さらに、先ほどふれた開かれた大学としての公開講座として、土曜教養講座、移動市民大学をやりました。土曜教養講座は本学の教員が中心になっているわけですが、それ以外に県外とか国外からも招きました。この講師は私

たちが探してくる場合もあるのですが、市民とかいろんな団体から、ぜひこの方を土曜講座の講師にしてくださいというような形で持ち込まれるケースも多かったのです。沢木耕太郎さんなどは、市民の方が「もう話はつけています。ぜひ土曜講座で招いてください」ということでやりましたし、ヘルムート・シュミットもそうでした。ヘルムート・シュミットは西ドイツの元首相ですけれども、こういう大物まで登場するというので、78年から始めて四半世紀を越え、現在、回数にして450回くらいまで進んでいるわけです。

そういう那覇市民を対象にした土曜教養講座のほかに、沖縄は離島がたくさんありますので、離島に出かけて行って移動市民大学というのをやっているわけです。これは実は学生たちのまねをしたのです。当時の学生たちは、本学で学園祭をやった後、宮古島とか石垣島とかへ移動して、移動大学際というのをやっていたのです。学生がおもしろいことをやっている、われわれもまねをしようということで始めて、今日まで続いています。ここには宇宙飛行士などにも来てもらいました。

80年代になってから夏季セミナーが始まりますが、これが地域づくりにかかわっていくきっかけになったわけです。夏季セミナーとして当初教育実践セミナーということで全国の教師、市民に呼びかけたら、県内も含めて全国から百数十名が集まりました。そのときに、せっかく遠くから来ていただくんだから、セミナーの後、県内を案内しようということで、「沖縄戦の跡をたどる」というオプションツアーをやったところ、これが大変好評だったのです。高校の先生方がこれに参加して一生懸命メモを取ったりして勉強をしている。それで、「どこがおもしろいですか？」と聞いたら、「実は私たちは修学旅行で平和学習をテーマにして広島、長崎に行っている。沖縄も平和学習の場として考えていたけれども、どうやっていいかわからなかった。それを沖縄大学が夏季セミナーで沖縄戦の跡をたどるということをやってくれたものだから、これ幸いと思って参加した」と言われ

る。

そして、その翌年から高校生を連れてどんどんやってくるわけです。当時、普通高校は飛行機が使えなかったものですから、私立高校が中心だったのですけれども、年間どれくらい修学旅行が来ているかという、30校でした。10年やってこのセミナーを終えたときにもう一度調べたら、600校に増えていました。すべてが平和学習をテーマにしているわけではないのですが、夏季セミナーがきっかけで沖縄への修学旅行が大幅に増えた。今日どういう状況になっているかという、2004年で小・中・高、専門学校など約2,000校、43万人の生徒が沖縄にやってきました。

私たちはこのセミナーの中で、『観光コースでない沖縄』とかいろいろの本を書いたのですが、それが事前学習の資料などになってよく読まれているわけです。

こういう公開講座とか夏季セミナーの実績をもとに、2000年に那覇の都市計画課からまちづくりの講座をやってほしいという依頼を受けて、それに組み込みました。講座をやった後、地域の人たちから地域の緑化を中心にやりたいという声が出ました。それで、緑化をやるんだしたらムイクワをやってみないかと。ムイクワというのはジャスミンのことですが、ジャスミンというのはもともとはインドから中国を経由して沖縄に来たのです。沖縄にはさんぴん茶というお茶がありますが、これはジャスミンティーのことなんです。

ムイクワと言いましたけれども、インドのサンسكريット語ではマリーカーというのです。このマリーカーの音を捨てて中国では茉莉花(モーリーホウ)と呼ぶそうですが、それがなまって沖縄ではムイクワになった。そういう歴史とか文化がこの言葉に詰まっているわけですから、やっぱりこの方言は捨てるわけにはいかない、ジャスミンという言葉を使うといかにも軽薄になってしまうということで、ムイクワを使っているのです。

このムイクワもほとんど消えていたのですが、朝、ムイクワの花をつんでお茶に浮かべて

飲むという習慣があったので、それを復活させようということで、大学周辺のイヨセミを中心に掘り起こしをやっているわけです。いまは相当広がってしまっていて、道を通ってもいいおいが漂ってくる。これが隣のまちとか中心商店街のほうにまで広がって、小学校の校庭に植えたりしてどんどん広がりつつあって、沖縄の香りにしようと思っております。

その次に始まったのは環境問題です。21世紀の最初の年、2001年に、私たちは全学集会を開いて、教育研究を通して環境問題に取り組むということを宣言しました。その年の秋にエコキャンパス宣言をやり、次の年にISO14001を認証取得して、次の年には那覇市と連携してEMS(Environmental Management System=環境マネジメントシステム)構築支援事業というのを始めたわけです。那覇市も、エコモデル創出事業といって、沖縄大学で学んで認証取得すると市が補助金を50万円出すとか、これは財政難で長続きはしなかったのですけれども、そういうように市と連携してエコシティづくりに取り組んだわけです。

そういう那覇市との連携をふまえて、今度は南部全域と連携して南部広域市町村圏事務組合との共同事業で「観光コース開発・ガイド養成講座」というのをやりました。これはかなり人気があったのですが、3年間で終えて、現在は「なんぶ地域づくりネットワーク会議」ということで、サトウキビ関連産業の経営者と行政の産業担当、商工会の人たち30名くらいで毎月1回塾を開いているのです。サトウキビ産業クラスターを形成し、これを拠点にして食品とかその他の分野にも広げていきたいということで塾を始めています。

それと並行して、県の農水部と連携して地域の農水産物を動かすようにするという講座をやっております。一つは泡盛マイスター講座。これは泡盛版ソムリエをつくらうという講座です。もう一つは社団法人の泡盛マイスター協会と組んでアドバイザー養成講座をやっています。これは県の認証資格になっています。両方とも大変人気のある講座ですけれども、これが

もとなつて、今年から始まった文部科学省の社会人学び直しニーズ対応教育推進プログラムに、本学の「菓子等食品ビジネスプランナー養成プログラム」が採択されました。

さまざまな活動と学生たちの成長

環境問題に取り組んだときに学生たちが活発な活動を展開しました。学生にとって一番大きな環境問題は学園祭だ、学園祭に大量のゴミが出る、それをエコ学園祭にしようという取り組みをやったのです。これはすばらしい取り組みでした。県のイベント、市のイベントなどをやるときにやはりゴミ問題が大変だということで、そのたびにうちの学生たちがアドバイザーと呼ばれて指導にあたり、いま県のいろんなイベントはエコ化が進んでいます。これは本学の学生たちが火をつけたところです。そういうこともあって、2003年の第1回全国大学生環境活動コンテストでは特別賞を受賞しました。

学生たちは毎年『エコ学園祭』という報告書を出して点検しながら、次の年はさらにいいエコ学園祭にしようという取り組みをしています。今年は「美ら沖繩・環境まちづくりリーダー養成事業」というのが現代GPに採択されました。そういうエコキャンパスクラブの活動につられる形で、卒業して環境NPOをつくってがんばる諸君も出ています。

こういう環境に取り組む学生に続いて、聴覚障がい学生が入ってきたときに、自発的に学生たちがノートテイククラブというのをつくったのです。そのときにノートテイクが何人もできて、すばらしい活動をしました。そして、県内の大学のネットワークをつくって障がい者支援の取り組みをやってくれたわけですが、この活動は今年の卒業式に学長賞を受賞しました。この成果をもとに文科省の特色GTに推薦して、「ノートテイクから広がる大学づくり、小さな大学から新たなユイマールの創造をめざして」が採択されました。

私たちはそういう学生たちの動きを見ながら、学生たちが取り組める場をつくっていけば、学生は自分たちでどんどん成長していく。昨日のまちづくりカレッジなどを見ても、昔に比べ

てかなり進化している、学生たちはああいう中で育っていくのだなという感じがしています。

そこで、私たちの大学では創立記念日はこれまで教職員中心に行事があったわけですが、これを学生主体に変えたわけです。大学づくりに学生たちを積極的に参加させていこうということで、学生主体の討論集会とか、昨年からは学生プロジェクトの提案、そして今年は大学だけではなくてまちづくりに関するテーマも募集して、採択されたものには財政的な措置をするという形でやっています。そういう形で学生を成長させていきたいと願っているわけです。

本学の学生支援の目標ですが、理念は「地域に根ざし、地域に学び、地域と共に生きる、開かれた大学」です。受け入れ方針は、「地域社会と積極的に関わり、地域社会のなかで自ら問題を発見し、その問題の解決に向けて努力しようとする学生、自らの能力を磨き地域社会に貢献しようという意欲のある学生を迎え入れる」という方針を立てているわけです。

そして、入ってきた学生の支援の目標を「多様な学生一人ひとりに対して、地域との関わりをも含め自らの人生を積極的に切り拓く意欲を育てること、それぞれの人生に必要とされる能力を身につけさせること、そして卒業に当たっては自信をもってそれぞれの人生を歩んでいけるようにすること」としています。

この目標が達成されているかどうかは、卒業式のときに満足度調査というのをやります。今年の卒業生は、「沖縄大学で学んでよかった」と答えたのが48%、「普通」というのが45%、「よくなかった」というのが7%でした。よかったというのを90%にもっていくのが目標ですが、道はまだ遠い。われわれはこういう満足度調査で学生支援の体制の点検をやって改善していきたいと思っているわけです。

文部科学省が今年から新たに募集した学生支援GPには、本学の「学びあい・支えあいの地域教育の拠点の創成」が採択されました。四つのプログラムがこの10月から走っているので学内はいま大忙しというところですが、い

ずれまた成果を報告させていただきたいと思っております。



鈴木 ありがとうございます。

沖縄大学がどんなふうに評価されたのかというのは、『沖縄大学の四つの教育プログラムが優れた教育活動に選定されました』というパンフレットの中に詳しく書いてあるので、必要な方は参考になさってください。

ご年配の方からすると、大学はこうも変わったのかと思われるところがあるかもしれません。一時大学はレジャーランドかなどと言う方もいたわけですが、それはもうずいぶん古い考え方で、むしろ大学を知らない評論家の言っていることだと思うのです。沖縄大学はいろんなことを試みようという学生の集まる場所なのかな、大学はまちづくり工房でもあるし人材工房でもあるのかなというようなことを感じたわけですが、皆さんはどうでしょうか。

続いて、北の大地の酪農学園大学ではどうだろうということで、まったく違う風土の中で学生たちが地域を見据えてどんな活動をし、どんな成果を生みだして社会づくりに取り組んでいるのか、工藤先生からお話しいただこうと思います。

■江別市における学生参加型の街おこし運動

工藤 皆さんこんにちは。今回はお呼びくださりましてありがとうございます。

酪農学園大学は札幌市から電車で15分程度と、都市部に近いところにあります。岐阜経済大学と私どもの大学は単位互換協定を結んでいて、昨年も岐阜経済大学の学生さんが1年間、勉強に来られております。今年は岐阜経済

大学の40周年だそうです、私の農業経済学科も、こちらの大学と大体同じころ、1963年にできた学科でございます。

昨日は学生さんの立派な報告をたくさん聞かせていただきましてありがとうございます。「なべ議論」などは非常におもしろく聞かせていただいたところです。なべの料理でいうと、学生の参加というのは脇役ではないかと思っております。そういう意味ではあまり目立たないくらいでいいのではないかと思いますけれども、皆さんのお考えをいろいろお聞きして、それぞれ考えがあるなと思いました。

先ほど市長さんのお話を聞いておりましたら、大垣市は人口16万人ということでしたが、江別市は13万人くらいで、いま隣の町から合併を打診されていて、どうしようかという議論をしているところです。

大麻地区の概要

「江別市における学生参加型の街おこし運動」ということですが、私どもの学生が参加しているのは江別市内の大麻地区というところなんです。大麻というと麻薬を連想されるらしくて、江別では大麻をつくっているのかとよく言われるのですが、そうではなくて、昔、オオアサという麻をつくってまして、その名称からとった地名ですので誤解のないようお願いいたします。

この大麻地区というのは、昭和40年くらいに団地ができて、札幌のベッドタウンとして成立し、そのころに急激に人口が増えました。それから40年くらいが経過して、ひたひたと高齢化が進んできたというところなんです。高齢化社会というのはなにか悪いようなイメージがありますが、私も自分が65歳に近づいてきて、高齢化社会というのはいい社会だと逆に思っているのです。老人パワーでがんばりましょうよということでもいいのではないかと、それだけ住みやすいまちになっているから高齢化しているんだというふうに判断しております。

北海道全体の人口の伸びと江別市の人口を比べてみますと、最近では若干人口の停滞が見られ、北海道全体も経済の停滞の中で人口停滞が起

こっているという状況です。

江別市は三つの地区に分かれます。そのうちの江別地区というところがシャッター街になっておりまして、最初にその地区を見にいった、これは大変だという意識をもったのですが、私たちの大学を出たすぐのところの大森地区は高齢化がもっとも進んでいる地域で、高齢化率が30%を超えているようなところも部分的にはあります。

クラスター・クラブの活躍

私どもはクラスター・クラブという名前で活動しております。産業クラスターとかいう言葉がよく使われるわけですが、いろんな業態の人たちと連携してやっていこうということですが、クラスターというのはもともとブドウの房というような意味がありまして、私どもの学生の活動としては、ブドウの房の1粒になりたいという願いから、クラスター・クラブという名前で活動しております。

大森銀座商店街の空き店舗を使わないかというお誘いを受けたのをきっかけに、学生が主体になって店舗をどう使うかというようなことで活動を始めました。当初は古着などを販売していましたが、近所にリサイクル関係のショップが増えてきたということでやめまして、それ以降は学生の出身地の農産物加工品等を仕入れたり、酪農学園大学は生産をする学校でございますので、アイスクリーム、チーズ、バター、ハム、ベーコンというようなものも日常的に販売する特産物の店として活動をして、それがいままで6年間継続してきた原動力になっております。昨日はちょうど6周年の記念フェアをやっております、残念ながらここに来られなかったわけです。

冬になると北海道は雪が降りまして、本当は店内で物を売りたいのですが、お客さんはなかなか店内に入ってきてくれないのです。ですから、外に出てということ、むりやり外に出てやるので、耐寒の訓練をしているような感じで、学生諸君は死にそうになって販売をするということになります、北海道内のもの、江別のもの、それから来ている学生の府県のもの

のなども販売しております。アイスクリームは常時酪農学園大学の製品を販売しております。フェアのときなどは店内でワタアメをつくって販売したりします。

植林活動ということで、ヤンキーのような学生もいますけれども、みんなで楽しく植林しております。今年は100人くらい集まりまして、北海道の道民の森というところで、広葉樹を中心として1,500本くらい植えました。

7月には全道の焼き物愛好家が集まるお祭りがありまして、これに10万人くらい集まります。プロとアマと両方いるので、いつもプロとアマの間でのいろいろな問題はありますけれども、私どもも実行委員会に所属しておりまして、学生が毎年副実行委員長を仰せつかって、ゴミの問題とか掃除の問題とかシャトルバスの誘導等、運営の部分を担っています。

それから、肉製品の製造をして販売活動しております。私どもは社会科学の分野であるにもかかわらず、オリジナルベーコンというものを製造しておりますが、今回はベーコンにプラスしてチャーシューも製造することになりました。なぜチャーシューをつくるかということ、江別は小麦が有名になりました。農家さんのつくった「はるゆたか」という品種の小麦を地元の製粉会社が少ロットで小麦にして、それを地元の業者さんがラーメンにして、それをさらに地元一般のラーメン屋さんがつくって売るといような地域内の循環があって、地産地消の形態ができております。その中に地元のチャーシューが入るとラーメンに物語ができるのではないかとということで、今回からチャーシュー製造を手がけています。

また、お年寄りの人たちと一緒に料理教室も積極的にやっております、クラスター・クラブで得た利益を、こういう料理教室に対して、5万円程度ですけれども、提供させていただいております。

大森銀座商店街での夏祭りはちょうど夏休みに入るころにあります、学生は商店主の人と一緒に、焼き鳥を焼いたり、焼きそばを焼いたり、ビンゴゲームの進行をしたりという

ようなことをします。祭りの一番人気はビンゴゲームでして、100円でビンゴのカードを販売して、1等賞が折りたたみ自転車というようなことで大変人気があります。クラスター・クラブとしてはお米1俵を賞品にしたりして、これも大変人気がございます。

最近はお米1俵を賞品にしたりして、これも大変人気がございます。

私たちは独自の市民向け活動としては、巧の技シリーズということで、焼き物基礎講座とか、そば打ち体験、木彫り体験、それから12月1日にはベーコンづくり体験を企画しております。ベーコンづくりににつきましては、江別市の経済部の補助を得る予定であります。

活動の成果とこれから

活動の成果ということですが、こういうまちおこし運動は息が長いものなので、軽々に成果を求めるべきではないと思います。しかし、若者参加型のまちづくりをして、商店街に少し若い声が響く空間をつくっていきこうということが一つ大きな目的でして、それは若干達成されているのかなと思います。お年寄りが住みやすいまちに対する調査報告書を出したりという形で、大学と地域商店街の新しい交流の方向をつくってこられたのかなという思いはあります。

それから、江別の農家の方々と農業の連携をいろいろな形で行っていきということも若干できてきたと思っております。消費者と生産者の間に私たちが入ってさまざまな活動しておりますが、消費者の厳しい目線というものも肌で感じながら、なおかつ酪農学園大学のブランドを背負いながらいろいろな活動をしているということがございます。

それから、私ども農業政策学研究室のこういうような活動を通して、この地域が「高齢者の住みやすいまちづくり構想」の北海道のモデル地区に選定されました。若干の補助金をいただきながら市民参加型の新しい展開が進んでおりまして、お年寄りによるコーヒーの提供とか、託児所とか、介護とかいう形での市民活動が始まってきています。私どもの研究室でも、江別

のお好み焼き屋さんとのコラボ商品、共同商品なども開発するという新しい取り組みが始まっています。

大学のこれからの方向として、今年から学科として地域活性化も一つのコースとして出発いたしました。そういう意味では、学科の教育内容の一つとして取り組むようになってまいりました。

以前、まちおこしの第1回目の交流集會に集まったときに、お互いの大学間で商品の交換をして販売活動につなげられればいいねという話をしておりました。これはまだ実現しておりませんが、皆さんから何かご提案があれば、私どもはいつでも酪農学園大学の商品をご提供できますのでよろしくお願ひします。



鈴木 ありがとうございます。

続きまして、共立総合研究所の國枝さんから話題提供をいただきます。

■大学の役割～「教育」「研究」、そして「地域力」

國枝 みなさん、こんにちは。共立総合研究所の國枝でございます。私からは地域に大学があることで私たちが何を得ているかということをもまずここでご紹介したいと思います。まず1点目は人がいるということによるにぎわいです。

2000年を100とした将来の推計人口を見ますと、この地域もこれから人口が減少していくことが予測されているところがほとんどだと思いますが、これはなにも大垣市にかぎって人口が減っているというわけではありません。皆さんが暮らしている全国の市町村で、1995年から2000年の間に人口が減少に転じてしまった市町

村は全体の3分の2にもなります。2025年から2030年になると、全国の市町村のおよそ95%は人口が減少に転じていると予測されています。

これを大垣市についてももう少し具体的に見てみたいと思います。先ほど、市長から大垣市の現在の人口は16万7,033人だという話をいただいたのですが、大垣の人口はこれからどんどん減少に向かい、30年後には現在よりも13%人が減ると予測されています。

大学の効果

では、この大垣市に大学があることでどれくらい人が集まってきているかということですが、皆さんは夜になるとおうちに帰られます。そして、ご飯を食べて眠られると思います。そんなときにまちの中にいる人口を夜間人口といいます。皆さんは、朝起きて通勤とか通学をされるわけですが、そのときに大垣市から出ていってしまう人数のうち、大垣市以外の岐阜市とか各務原市に出ていってしまう人数はおよそ2万4,000人です。岐阜県内ではなくて、愛知県や三重県、滋賀県に出ていってしまう人は、およそ8,000人いるわけです。大垣市に残る人というのは13万人です。

では13万人だけなんですかとというと、逆に外の地域からも大垣市に人が入ってきてくれるわけです。その人数というのはおよそ3万8,000人。この大垣市内には、いま三つの大学があります。岐阜経済大学さん、大垣女子短期大学さん、そしてIAMASという三つの大学にどれくらい人が働いたり通学したりしているかというと、大体2,700人くらいです。この大学に大垣市以外の地域から何人くらいの方が集まってきてくれるのだろうと試算したところ、およそ1,718人という結果になりました。

先ほど、大垣市は人口が減少していくよと申しましたけれども、大学があることで大垣市以外から1,718人の人が集まってくる。これは学生さんと教員の方ですから、大体15歳から64歳までの間に入ると思います。そこの人口が1,718人分押し上げられて、大垣市の人口は1.1%増加する。この1.1%増加した人たちが、大垣市でご飯を食べたり、洋服を買ったり、本を買っ

たり、駅を利用したり、下宿したりしてくれることで大垣のまちににぎわいを呼んでくれるということが第1点です。

地域に大学があるという効果の第2点は、先ほども皆さんの活動をご紹介いただきましたけれども、直接大学が地元にかかわってくれるという効果があります。

『日経グローバル』という雑誌が、今年全国の735の大学を対象に行ったアンケート調査があります。まず大学の地域貢献への取り組み状況ですが、「あなたの大学では市民団体やボランティア団体へ支援していますか？」という質問に対して、全体のおよそ4分の3、76.4%の大学が「支援しています」とお答えになりました。

ではその地域貢献ですが、「大学に専門の部署はありますか？」と尋ねましたところ、「すでに専門の部署がある」と答えた大学が全体の38%、これから設置する予定だという大学も含めると、全体の約半数が地域貢献について「専門の部署を設けている」あるいは「設ける予定である」と答えています。

具体的に大学ではどんなことをやっているかということですが、講座の開催について聞いています。「住民向け地域貢献事業などの開催状況は？」という質問に対して、「小学生、中学生、高校生向けの講座を開催している」と答えた大学が73.2%で、その数は年間にして平均45.3回です。およそ7割の大学が「週に1回くらいの頻度で子ども向けの講座を開催している」とお答えになりました。社会人向けの公開講座の開催についてはもっと多いです。94%の大学が実施しており、その実施回数は年間にして平均95.6回、三～四日に1回くらいの頻度でやっているのが平均というお答えになりました。

さらに、「教員あるいは学生の方が参加するボランティア活動をしていますか？」という質問に対して、全体の83.3%が教員も学生もボランティア活動に参加しているという結果になりました。

データから見る地域力

皆さんがこれからまちづくりにかかわられるにあたりまして、一つのキーワードを覚えておいていただきたいと思います。それは「地域力」という言葉です。これは何かと申しますと、人の“絆”も大切な資本だということです。

例えば、ここでいうと大垣市になるのですが、けれども、「皆さんがお住まいの市は住みよいまちですか？」と聞かれたときに、どんなものものさしになっていたかという、いままでは目に見えるようなモノでした。雇用や産業を生み出す大きな企業があるか、病院はたくさんあるか、いざといったときにお医者さんはたくさんいるか、道路がきれいに舗装されていたり、上下水道がちゃんと通っているかといった目に見えるモノがものさしだったのですけれども、この「地域力」は違います。お隣近所の人とのつきあいの深さを測るのです。お隣近所とのつきあいの深さが深いということも、地域にとって大切な資源ではないかというような考え方です。

ちょっとおもしろいデータがありますので、ご紹介いたします。それは、平成14年に内閣府が発表した調査の結果なのですが、横軸に各都道府県のボランティア参加率を、縦軸に犯罪発生率をとると、これは分布をだ円できくってみるとよくわかるのですが、ボランティア参加率が高い地域ほど犯罪発生率は少ないんじゃないの、という話です。同じように横軸にボランティア参加率、縦軸に完全失業率をとってみると、ボランティア活動が盛んな地域ほど失業率は低いんじゃないの、という話。そしてもう一つは、横軸はボランティア参加率で、縦軸が合計特殊出生率ですが、ボランティア活動が盛んな地域ほど生まれる赤ちゃんの人数は多いんじゃないのという形が出ています。

内閣府は、ボランティア活動と縦軸にとったそれぞれの項目に関連性があるとは断言していませんが、ボランティアが盛んな地域であればあるほど、地域に有益な成果が出ているのではないかと結論づけております。

最後に、都道府県別ソーシャルキャピタル指

数というものを皆さんにご紹介します。ソーシャルキャピタル指数というのは、「信頼できるか、協力できるか、結束できるか指数」というような感じで読んでいただきたいと思うのですが、これはアンケート調査の結果をまとめたものなのです。どんな質問をしたかという、難しいことは聞いていません。「お隣近所とのつきあいは多いですか」「近所の方は信頼できますか」「お友達は信頼できますか」という人のつながりに関するような質問をして、それを指数化したものです。岐阜県はこれが全国4位の結果となっております、近所とのつながりが非常に濃密な地域である。ですから、先ほど申し上げた目には見えない「地域力」という価値を高めるのに非常によい素地をもっている地域ではないかと思えます。

学生への期待

これは鈴木先生へのお願いになるのですが、岐阜県の大学生の特徴という、他県の高校を卒業して岐阜県の大学に進学される方というのが非常に多くて、岐阜県内の大学生のうちの3人に2人は他県の高校を卒業していらっしゃいます。彼らはどんな能力をもっているかという、冷静に岐阜県をチェックする能力をもっている。この地域のいいところも悪いところもチェックできる、批判する目をもってくれている。そういったものをこれからの地域づくりに役立てながら、大垣市をよりよくしていただけたらと思います。



鈴木 ありがとうございます。

宿題というか新しい課題をしっかりといただいてしまいましたけれども、國枝さんが非常によ

い話題を提供してくださいました。

さて、ボランティアを含めた市民活動、そして学生たちあるいは大学の社会貢献活動というものは、人と人とのつながりをつくり、さらには働く人間の労働者としての感性も豊かにしてくれる。自分の生きる糧である収入を増やすことはもちろん大事なことですけれども、その使い方や収入だけではなくて、自分の家族や地域社会や社会のあり方についてまで目を配れるような社会資本としての人づくりが、これからはとても大事なのだというご指摘があったように思います。

そういった意味では大学はずいぶんいろんな宿題をもらったような気がします。ここまでのパネラーの皆さんの話を踏まえて、市政を担う責任者である市長としては大学にどんなご注文がありますか。

小川 先ほどちょっと申しましたけれども、大学は地域のシンクタンクでありますので、地域をよく知る人たちに、まちをよくするためのいろんな提言、提案をしていただけるとありがたいと思います。

いまは大垣だけではなくて、日本全国のまちに大規模商業施設が進出してきて、車社会によってまちが拡散し、中心市街地の空洞化ということが大きな課題になっております。市民アンケートをさせていただきましても、なんとか中心部を活性化してほしいという希望があったりするわけです。そういうときに、若い人たちの若い感覚で、活力のあるまちづくりについての提言、提案をしていただけるとありがたいと思います。

酪農学園大学の先生のお話にありましたクラスター・クラブなどは、空き店舗を活用して大学の生産物を販売する、また、いろいろな事業にも参加をしてまちづくりに貢献しておられるということで、すばらしい形ではないかと思っております。まちづくりへの積極的な提言、提案とともに、そういうような形でまちづくりに大いに参加をしていただけるとありがたいと思っております。

沖縄大学の先生からは、修学旅行の生徒が増

えているというお話がございました。以前は小・中学校、高校の修学旅行というと、広島、長崎というのが定番であったわけですが、沖縄戦をたどるツアーをやったらたくさんの方々が増えるようになった。また、沖縄は豊かな自然環境がありますので、そういう豊かな自然環境を見にこられるということもありまして、沖縄の観光交流産業の振興にも役に立っているすばらしい企画であるなあと思って聞かせていただきました。今後もいろいろなところで新しい企画をしていただけるとおもしろいのではないかと感じました。

逆に質問させていただきたいのですが、エコシティ、エコキャンパスについてはどのような形で行政と連携してやっておられるのか、また行政のほうはエコシティ、エコキャンパスに対してどのようなサポートをしておられるのでしょうか。

最後に、共立総研の國枝さんの「地域力」のデータで、ボランティア活動の活発な地域と刑法犯の認知件数の相関はよく理解ができるわけです。ボランティア活動の盛んな地域ほど刑法犯が少ないというのは、当然そうだろうと思うわけですが、ボランティア活動が盛んな地域ほど失業率が低いというのは、本当にそうなんだろうか。逆のような気がしないでもないわけです。また、ボランティア活動の盛んな地域ほど合計特殊出生率が高いというのも興味深いデータであるという感じがいたしました。このへんについて何か根拠があれば教えていただけるとありがたいなと思いました。

鈴木 それでは山門先生、國枝さんの順でお願いします。

山門 那覇市との連携の具体的な内容ということですが、土曜教養講座が始まって間もないころ、これは市民の生涯学習の場であるということで那覇市が補助金を出してくれました。当初は100万円くらいいただいたのですが、財政難で年々減らされて、いまは半分くらいになっています。

環境については、大学で環境マネジメントシステム構築支援事業ということで、企業の人た

ちを集めて講座をやったわけです。この講座は本学だけではちょっと無理なので、京都精華大学の応援も得ています。実は本学の環境の専門家は学長でして、学長は沖縄県の環境審議会の会長、那覇市の環境審議会の会長を兼ねています。それで、大学でEMS 構築支援事業をやり、那覇市はエコモデル創出事業をやるという先ほどお話ししたような関係です。そのほかに、それぞれ環境マネジメントシステム、ISO などを取得しているわけですが、市役所の職員が大学の監査をやる、そして沖縄大学で環境マネジメント実習とか環境関係の講座を受けて優秀だった学生に、今度は那覇市の監査をやってもらうという形で、相互乗り入れで内部監査をやっていきます。

それとは別に自治体学講座というのがあって、市役所の課長さんたちに交代で沖縄大学に来ていただいて、オムニバスでいまの地方自治の問題について講義してもらっています。

環境に関しては、私たちはISO14001を取ったのですが、これをすべての職場や学校まで広げるのは難しいと思うのですね。それで、教育委員会と連携して学校版ISO というものの構築支援をやっていきます。われわれはこれを基地版ISO と言ったりもしますが、教育委員会の支援を受けて、これまでに那覇市の小学校一つと隣の豊見城市の中学校2校で学校版ISO を構築しています。

國枝 「地域力」という指標はまだ新しくて、いま注目されている指標ということになります。大垣市は子育てナンバーワンの市を目指すということですが、住みやすいまちには、ボランティア活動にかぎらず、人と人とのつながりがあるということ、やはり人が集まる場所だと思えます。ですから、そうした環境であれば、大垣はいいまちだよということでこれからもっと人が集まるようになって、出生率も上がっていくのではないかと思います。

ただ、先ほどお示したのはデータを二つかけあわせただけの現時点のデータですので、この数字がいかに証明されるかというのはまだこれからの部分ではないかと思っています。

鈴木 実はハワイ州でも似たようなデータがありまして、ボランティア活動をするということは、自分の飲み食いということだけではなくて、社会との接点を求める気持ちを育てる。ですから、働くということについても、働くために資格を取得しようとか、次には仕事に就いて働き続けていこうとかいう意欲や行動に結びついていくので、失業率を減らすことになるという調査がやられたのです。その現場に私も立ち会ったことがあったので、國枝さんのお話を聞いて、なるほど、日本でもやっぱりそうなんだと思ったわけです。ボランティア活動というのは人の気持ちの中に、あるいは社会の中にいろいろな可能性をつくっていく。それがボランティア活動のとても重要な力ではないかと思いました。

ここで、会場の皆さんから質問をいただく前に、私からお2人の先生にお伺いしたいと思います。



山門先生は沖縄の事例をたくさん挙げて、那覇市民、沖縄県民のための大学にしたいということをおっしゃいましたが、それは先生1人が活躍しておられることなのか、それとも大学を挙げて取り組んでおられることなのか。大学といっても、先生のように地域に目を向ける人ばかりではなくて、そんなことは大学のすべきことではないという意見も本当はあるのではないかと。また、行政や市民から見ると、偉そうなことを言うけど大学は大して何もできてないよということも多いのではないかと。そのあたりをどう口説いて、いまのような形で大学づくりと社会づくりを結びつけてこられたのか、そこにどんな苦勞があったのかお伺いしたいので

すが。
山門 地域貢献というようなことが盛んにいわれて、どこの大学も地域貢献をやらないと大変だといわれているのですが、本学の教授会の中にも、役に立つことをやるのが大学ではないと言う人もいます。しかし、本学は地域貢献室をもってまして、そこでは環境問題とか学校版 ISO の支援とか、那覇市との連携とかをやっています。地域研究所は足元の南部を中心とした研究で、南部との共同講座をやったりしています。これは少数の人間がやっているだけではなくて、大学全体としてそういう方向に動いてきていると思います。

大学も大変な時代に入ったわけでして、全入時代、選ばなければ誰でも入れるという時代が来たわけですから、私たちが地域の大学として生き残るためには、やはりまずは自分の未来を積極的に切り拓いていけるような学生をどう育てられるか、もう一つは地域活性化にどれだけ貢献できるか、地域になくってはならない大学にならないともう生き残れないだろうと思っているわけです。ですから、そういう方向で学生支援とか地域貢献活動とか、自治体と連携して地域共存という取り組みをやっているところです。

鈴木 工藤先生は学部長もしておられて、そういったことを全学的にやろうとおっしゃる立場だと思えますけれども、酪農学園ではどうですか。

工藤 江別には大学が四つありまして、12万人の中の1万人が学生という地域ですから、市からの大学に対する期待というのは非常に大きいわけです。しかし、例えば私の大学でいえば、地域活性化というのは研究としてはどの先生方もけっこうおやりになるのですが、実際にそこにはまるといいますか、日常的な活動ということになると、厳しいのでなかなか参加してこないというのが実態です。

ただ、大学が四つありますので、一つの大学から1人出てくれば4人ということで、その先生方と一緒にさまざまな活動ができていくということは言えます。

実は私は、そういう活動とは別に志というものはもっているつもりであります。健士健民といいまして、健康な土が健康な民を育てるという学校の方針がありまして、教育内容もちろんそうなんですけれども、学生部長としては、朝食の欠食をなくそうということで、春と秋の2回に分けて、ワンコインで学生に朝食を食べてもらおうという運動を今年から始めました。小さな運動ではありますが、学生諸君が1,000人くらい参加してくれまして、そういう健康増進というか、食育教育ということも始めました。

それから、タバコの問題というのもしろいろありますので、いずれは禁煙にもっていくアクションプログラムを進めたいということで、大学の中で分煙化はすでに進んでいるのですが、校内に喫煙のできる場所が30カ所近くあるものですから、これはいくらなんでも多いだろうということで、来年は10カ所に、その次は5カ所に、その次はゼロにという形でプログラムを実施したいと思っております。

また、酪農学園大学は、ちょっと都会から離れているということもあって、車で通学する学生なり先生も多いものですから、CO₂の問題についてもきちっと取り組まなければいけないということで、CO₂排出削減のための運動もしようと思っております。

それから、最近では大学における危機管理体制が問題になっておりまして、東京都内ではほぼすべての大学が、30年以内に確実に地震が来るということを想定して、危機管理体制における学生の生存の確認方法とか、食料の備蓄等について実際にもう動き出しております。麻布獣医大学では全学生、全教職員に3日間の食料が配給できるように準備しております。

食料の自給率というと全国では39%ですが、北海道は201%ということで、何となく食料は心配ないよと安心しているところがありますが、大学は近隣の市民の方の受け入れ場所にもなっていますので、そういう意味での食料の供給まで考えると、実際に何か危機的な状況が起きたときにはそう簡単ではないだろう。それから、学生の安否確認以外に、近隣の市民の何ら

かの援助に学生が入れるような準備というものもしなくてはいけない。そういう意味での地域の人たちとの連携を視野に入れた大学の活動もあるのではないかと、そういう考え方で皆さんと一緒に進めていければと思っております。



フロアからの発言

鈴木 ありがとうございます。

それでは、会場にお越しの皆さんからパネラーの方たちにいろいろな質問を投げかけていただきたいと思います。物申すということでもけっこうですし、手厳しいご意見も大歓迎ですが、いかがでしょうか。

質問者 僕は、大垣に生まれ育ち、大垣に住んでいるので、すばらしい大垣になってほしいと思っっているわけですが、技術的なことはいろいろあると思うのです。僕が常々思っていることは、その奥に精神的なものがもっと醸成されて、精神文化都市大垣になってほしい、そしてボランティア推進を目指す都市になってほしいということ個人で思っているのです。そういう意味において、どうしてそういったボランティアが大切なのか、人と人が思い合い助け合うことが大事なのかという原点に立つには、やはり精神文化的なものが基本にあって、それが広まっていったときに、本物のそういったものができると思うのです。

ところが、いまの教育とか市政とかいう面では、宗教とか真理とかいったものにはなかなか直接にかかわりあうことのできない状態だと思うのです。そういった精神文化を高めていくということについて、市長さんはどのような考え

方をもっていらっしゃるのかお伺いしたいと思います。

小川 まちづくりは人づくりといわれるわけですから、まちづくりをやっていくときに、外見的にハードをどうするか、形をどうするかというような問題もありますけれども、それ以前に、このまちをいまいちにしたという熱意がきわめて大切だと思っております。ですから、総合学習の時間などを使って子どもたちに対するふるさとについていろいろ教えていただいて、ふるさとに対する愛着をもってもらう。そういうふるさとに対する愛着が、大きくなったときに、いまいちにしよう、いまいちづくりをやっていこうという気持ちにつながるのではないかと思っております。

また、それは大人でもそうでありまして、生涯学習の場におきましても、絵画とか書道とかを学ぶということに加えて、いろいろな機会にふるさとについても十分学んでいただいて、ふるさとに対する思い入れ、愛着といったものをはぐくんでいただければ、その気持ちがまちづくりに反映されて、まちをよくしよう、地域をよくしようという考えにもなってもらえるのではないかと思います。

これは大学も同じでございます。大学においても地域のことに大いに学んでいただいて、地域の特性、個性を生かした大学づくりをしていただく。日本全国にたくさん都市はあるわけですから、東京や大阪や京都や名古屋といった大都市にあるのと同じような大学をつくっていたのでは、地方大学としての意味がないわけですから、地方の大学では地域のよさを教えていただく、地域のよさを探究していただく大学になることによって、地域に対する愛着、思い入れ、ふるさとに対する愛着、思い入れ、自分たちが学んでいる大学のあるまちに対する思い入れといったものにつながるのではないかと思います。

そういう意味におきまして、大学での学習、小・中学校での学習、成人学習などを通して、ふるさとへの愛着、思い入れを増すようなふるさと学習をしっかりとやっていくことが大切では

ないかと感じております。

鈴木 大学だけではなかなか難しい問題ですから、ふるさととか地域とかをよく知る方、あるいはふるさとをリードしてきたいろいろな方たちと大学が連携して、時には冠講座などもつくって学生や市民に参加していただくとか、学び場づくりをこれからもっとやっていかなければいけないだろう。

その点では、沖縄は複雑な歴史をもっているということもあって、山門先生のところは沖縄大学論という授業でもって、自分の大学の歴史を語りながら同時に沖縄の歴史を語るということを長くやっておられるようですので、ぜひ直接聞いてみてください。

ほかにはいかがでしょうか。

質問者 岐阜経済大学の学生でアダチといいます。

ボランティア活動の活発なところほど出生率が高かったり犯罪件数が少なかったりするということでしたが、ボランティア活動が活発だからといって本当に出生率が上がったり犯罪件数がゼロになったりするのかなと思いました。

僕も、ボランティアで大垣市社会福祉協議会のほうにお世話になっているのですが、そこに来ている学生に、なぜボランティアに来たのか聞いてみると、ゼミの先生に行けと言われて来たという学生が多くて、純粋にボランティアをしようと思って来ている人が少ないように感じているのですが、そういう人にやる気を出させるという面ではどういう考え方があるのでしょうか。

國枝 阪神・淡路大震災のときに人とのつながりがまた復活したといわれているのですが、皆さんは先生に行けと言われて行ったり、誰かに行ってみたいといわれたり、きっかけはいろいろだと思うのですが、それが本当によかったと思えるのは、やはり何かあったときだと思うのです。学生の皆さんが比較的受け身なのは、まだそういう経験がおありにならないからかもしれませんね。

この大垣市でいうと、荒崎地区が5年くらい前に浸水しました。そのときに私は、大垣共立

銀行の社会貢献委員という形で参加をさせていただきました。何をやったかという、皆さんのご自宅のリビングダイニングは大体フローリングだと思うのですが、床上浸水するとばい菌がいっぱいつきますから、小さな歯ブラシに消毒液を浸して、1cmくらいずつ床を消毒していくのですね。そのときに私以外の銀行の方も、地域の企業の方も、近所の方もいらして、みんな「ありがとうね」「よろしくね」「どちらからいらしたの?」と声をかけ合いました。そのときに、大垣というのは助け合えるまちなんだというふう感じたのですけれども、これからそういった貴重な経験をされていくと、住みやすいまちだという思いや、ここにいたいなという感覚が少しずつ養われていくのではないかと思いますがいかがでしょうか。

工藤 先生に言われたからというご発言がありましたけれども、私どもの大学で、新潟の地震があったときにボランティア活動をする学生を募集したら、これは別に先生が行けと言ったわけではないですけれども、50人以上の学生が説明会に集まってきました。それから、タンカーの事故で重油が海にいっぱい流れたときに、野鳥が油まみれになった。そういう野鳥の洗浄作業があったときにも、学生諸君が活動に参加してくれていますので、いろいろなタイプの学生がいるということではないかと思います。

鈴木 フロアからどんどん質問をいただきたいのですが、ここで連携大学の大御所である片寄先生から、あんたたち都合のいいことを言っているが本音はどうだろうということを、自己反省も含めて発言していただければと思います。

片寄 大阪人間科学大学の片寄と申します。

壇上の先生方、そして昨日から集まった先生方を、こんなにいい先生が日本の大学にはいるんだという確信をもって眺めておりました。本当にすてきな、日本の大学はまだ捨てたもんじゃないなど。ここに集まっている先生方は学生さんを見る目線がやさしくて、学生と一緒に何かやろうという気持ちの先生が多いのですが、大学の同僚を見ていると、そういう人は

わりあい少ないのです。山門先生とか工藤先生のようなすてきな先生が各大学にそうたくさんおられるのでしょうか。

山門 先ほど、私たちの大学の学生支援の目標をちょっと説明させていただいたのですが、大学は教員が中心になって運営するところだ、教員は研究が中心であって、その研究に基づいて講義をやり、学生は勝手についてくるもので、育っていくものだと思っている人たちが、まだかなりいると思うのです。でも、そういう時代は過ぎ去った。

うちの大学は、学生主体の大学づくりをやりうと言っているわけですがけれども、意識の転換というのは非常に難しいだろうと思うのですね。地域貢献で地域に行き行ってやるというと、地域の人と対等にいろいろやるのではなくて、教員は習性で教えたがるわけです。共につくるといことが非常に弱い。

私たちは今回、競争力ではなくて、共につくる力の共創力をということで、「競争力よりも共創力」ということを、学生支援 GP の中で打ち出しているのです。共に創る力というのは、ピアサポートといって、学生同士が互いに支援し合いながら、あるいは地域ぐるみで支援し合いながらということですがけれども、われわれが地域にかかわるときもまったく同じで、地域と共に創っていくということなのです。

ですから、教員の意識の転換を図らないといけないのですけれども、簡単には変わっていかないというところはあると思います。しかし、私一人でやっているわけではないですし、今回学生支援 GP の文章を私たちが中心になって議論し、実際に書いてくれたのは若い教員でした。彼が書いたのを見て、私よりすばらしい文章を書くなと思ってほっとしたのですけれども、やっているうちに教員も育ってくるのだらうと思っています。

工藤 私どもの大学では、こういう運動が続くように、一つはコース制の中に地域活性化というものをつくって動きだしました。しかし、先生がおっしゃったように、いままで個人商店の部分が多くて、それは運動としてはわかるけれ

ども、実際にはなかなか参加できないという中で、私はある程度の年齢以上の方ははっきり言ってあきらめています。ですから、入ってきたばかりの、まだ右も左もわからないような若い先生を、だまして農村地帯に連れていったりして、参加していただけるように手なづけているところですが、私はあと2年半くらいしかありませんのでちょっと焦っております。

片寄 大学での教員の評価の仕組みとして、地域にいくら貢献しても評価されないのです。やはり論文の本数が何となく、年間にどんな学会にどれくらい出したとかいう部分でしか評価されないこれまでの仕組みがありまして、地域に出てどろどろした活動を一緒にやって、本当に地域のために大学が育っていくことこそ大学の一つの重要な使命であるというようなことを考えている先生がおられたとしても、それをやる暇がないといえますか、論文の本数を数えないとだめだということで、なかなかそういう活動が評価できない仕組みになっているのです。だから、そこのところは一生懸命やっている先生をあまりこき使わないで、大事に育てられますように地域の方々に私からもお願いしておきます。

鈴木 片寄先生が期待以上の発言をしてくれました。

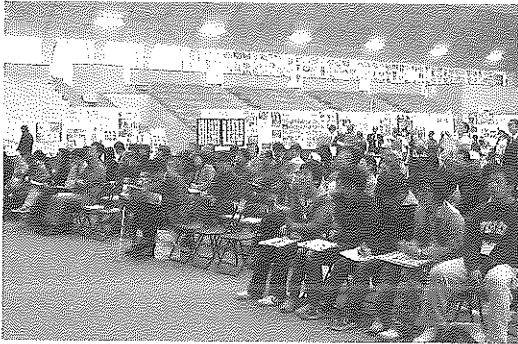
それでは、時間も迫ってまいりましたので、ぜひこのことだけは聞いておきたいということがあればお受けしたいと思いますがいかがでしょうか。

質問者 岐阜市から参りました。

今日は、地域の知的な資源の一つとして、大学を取り上げて論じていただいたと思います。この大垣には、シンクタンクとして大垣共立の総合研究所があるということで、私見ですがけれども、これまでそういうシンクタンクは、市民レベルの活動ではあまり意識できなかったのですが、大学同様、これからはやはり地域との関係が問われると思うのです。今日は研究所を代表してということではなくて、個人的な見解でもけっこうですので、これからこんなことを市民としてやりたいというようなことがありました

らぜひお聞かせください。

國枝 私どもの大垣共立銀行は、地元にある銀行ですので、やはり地域の発展がひいては銀行とか私たちの発展につながるというふうに思っています。そういった意味では、大学、あるいは銀行や私たちがもつネットワークをつなげて地域の広がりができていけばいいなと思います。



まとめの発言

鈴木 今日は「かがやくまちを 市民の手で！」というテーマで、大学、行政のトップ、そして企業と、それぞれの立場からお話をいただきました。

これまでともすると、大学は大学の発展のために地域に何をしようか、あるいは社会にどう貢献しようか、教育の一端として何をやるか、就職のためにどう地域の企業と結び合おうかということを考えていたと思います。また行政も、例えば補助金を出して大学に働いてもらおう、あるいは市民活動に活躍してもらおう、行政改革にも協力してもらおう。企業も、社会的責任の評価ということもあって、社会貢献を見てもらおうということで取り組んできた部分もあったと思います。

そういうばらばらの価値観とか体制とか人材活用とか評価といったことではなくて、やはり地域社会を見据えて同じテーブルをつくって話し合いをしながら、役割分担をもって取り組んでいくという連携をしていかなければいけない時代になってきているだろう。また、そういうコラボレーションの中でしか、本当に豊かな、かがやくまちはつくれないのではないかな。もち

ろんそれぞれがやるべきこと、できることはやらなければいけませんけれども、その上で連携して取り組むべきことを探りあてていって、アピールやジェスチャーではなくて、確実に成果として生みだしていかないと、学生からも市民からも評価をされない組織になっていってしまう、あるいは地域社会になっていってしまうことになりかねないと思います。

そこで最後に、これから大学がそのところを本気でやるにはどうしたらいいのか、あるいはそれに向けてどう変わっていけばいいのか、大学への期待も含めて一言ずつお願いします。
小川 大学は、教育研究が従来の形であったということでもあります。そういう意味で、有能な人材の育成ということは、相変わらず大きな課題ではあるわけですが、これからは地域に根ざし、地域と共生した大学づくりというのがきわめて大切でございまして、市民の皆さんと大学の皆さんとが一緒になって、魅力のあるまちづくりを進めていただけるようお願いしたいと思います。

そのときに大切なことは、地域の個性、特性を大切にしまちづくりを進めていくということではないかと思えます。先ほども申しましたけれども、大垣には大垣なりの特色がある。ソフトピアがありIT産業もある、ではITをまちづくりにいかに活用していったらいいのだろうかとか、あるいは大垣には薬学者の飯沼惣斎という人がおられましたし、佐藤三吉という外科医のバイオニアとなるような方もおられました。また、水都・大垣ということで、水という貴重な資源もあるわけでございます。こういう地域特有の資源を生かしながら、地域の皆さん、大学の皆さんと一緒にまちづくりを進めていけたらすばらしいなと思います。

山門 先ほど申しましたように、久しぶりにまちづくりカレッジに参加して、かなりまちづくりカレッジは進化しているなと思えました。関西学院大学の片寄さんのところから始まって、それを受け継いで大垣でやったのが2003年でしたが、今回皆さんの話を聞きながら、学生は育っているなあ、成長しているなあという感じを強

く受けました。

それから、大垣のまちを昨日、今日とずっと歩き、今日は市長さんから不交付団体になったという話を聞いて、大垣は経済力が強いなと思いました。

私たちの大学づくりも、このまちづくりカレッジの影響が非常に大きいわけですが、今回の成果を持ち帰って、沖縄大学の取り組みをさらに進化させていきたいと思っています。どうもありがとうございました。

工藤 実は、私どもの地域は、有効求人倍率が0.2しかなくて、卒業した学生を地域で受け入れる体制がほとんどないのです。ですから、市長さんにこういう素晴らしい活動をしている青年たちをぜひ採用していただいて、大垣のまちおこしにはずみがつくようにお願いしたいと思っています。

國枝 私たちが大学に通っているときとはもう時代が違って、いまの大学はすごく開かれた状態であって、学生さんたちも大学自体も非常に地域にかかわっていただいています。そのときに、先ほど鈴木先生にお願いしたように、大学生の方たちの新鮮な目というものを生かしていただいて、私たちのまちにいい刺激をもたらしていただきたいと思っています。

鈴木 ありがとうございました。

今回、岐阜経済大学も、学長の方針として、地域と共に歩む大学づくりに向けて全学的に改革すべきものは改革し、そして皆さんに力をお貸しいただくところはお貸しいただいて、大学としても連携、協働して地域づくりに責任をもって取り組むということを宣言しました。市民大学宣言といっているかと思いますが、それをもっと明文化して、まさに今年から着実にその歩を進めていきたいと思っています。今日ここに集まった全国の大学の皆さんも、これから地元に戻ってぜひ市民大学宣言、県民大学宣言ということを掲げて、今日の経験交流を生かしていただきたいと思っています。

また、来年は大阪人間科学大学で開催されます。ここはまだ7年目の新しい大学ですが、ぜひまたみんなでこぞって出かけて新しい

仲間を増やしていきましょう。

今日会場に集まった学生諸君、大垣市の市長が、特別枠を設けて優れた活動をする人たちの採用してくれるかもしれません。これは行革の方向とは違うかもしれませんが、優れた人材を外から登用していただければ、かがやくまちをつくっていくよききっかけになるかもしれませんのでぜひよろしくをお願いします。

これをもってシンポジウムを終了したいと思います。寒い中でしたが、寒さではなくて感動に震えた2時間ではなかったかと思います。いま一度パネラーの皆さんに拍手をお願いいたします。

(大きな拍手)

ありがとうございました。

